



空海作

「十喻を詠ずる詩」

現代語訳



お大師さまからの手紙
—さとりにみちびくのたとえ—





空海作

「十喻を詠ずる詩」

現代語訳



お大師さまからの手紙
—さとりにみちびくのたとえ—



弘法大師によるまえがき



02

弘法大師によるまえがき

この『十喻の詩』は
仏道修行者にとって
道を照らす明るい鏡であり、
悟りの彼岸に渡るための船や筏のようなものである。
ひとたび読み唱えれば、
膨大な仏典に含まれる意義を理解し、
ひとたび観じ念ずれば、
無量の経巻の説く真理に到達することが出来る。
この詩を見て私のことを思い、
千年後も忘れることのないように。

京都神護寺にて沙門少僧都遍照金剛（空海）
天長四（八二七）年三月一日

03

幻のたとえ

まぼろし



一、幻のたとえ

私が観るに、世界のすべては幻のようなものである。

あらゆるものは様々な因縁（原因と条件）によって合成された結果、限られた間だけ、仮に形をなしているように見えるのである。

無明（おろかさ）とそれによつて生じる誤った認識は、

自分の中にあるのでもなく、外にあるのでもなく凡夫の心を惑わせる。あらゆる世界はすべてが大日如来の住まう水蓮の城であり、

真理の世界は空（すべてのものは実体がないとする教え）すら超えて、色形や言語で表現できる世界を超えている。

春の園の桃李は人間の目を魅了し、

秋の水に映る月の美しさには人は幼子（おさなこ）のように酔いしれる。

物語の中の事物が実際に見たり触れたりすることができないようには、我々が現実と思い込んでいるものも絶対に確かなものではない。

目を惑わせる現世の価値に執着して迷い狂えば、

三界を輪廻する苦しみから永遠に抜け出せない。

この十個の喻えの教えを深く心に念じて執着を捨てれば、大日如来の清らかな境地に至ることが出来る。

かわいそうに、一時の幻に迷い執着する者はこの真理に気づくことが出来ない。さあ、迷妄の世界を超越して大日如来の世界に立ち帰ろう。

陽焰かげろうのたとえ



一二、陽焰かげろうのたとえ

のどかな春の日、光が降り注ぎ風がそよいでいる。

陽炎かげがゆらゆらと広野に立ち上り、盛んにその姿を誇つてゐるが、それは見せかけだけで、どこにも実体は存在しない。

そのことを知らない愚か者は、陽炎かげを追い求めてついに元の場所に帰れなくなる。走る馬や流れる川はどこにあるのだろうか？

遠くから見ればあるように見えたのに、近づいてみれば何もない。愚か者は陽炎かげを絶対的なものだと思い込み、とらわれて執着している。

凡夫は街の中を歩けば美男美女がいっぱいいるように見るが、これは男、これは女と区別すること自体が、

すでに迷いに囚われた妄想にすぎないのである。

同様に、覚つた人や賢人を特別な存在だと区別して見ることも間違いである。心身を構成する五蘊ごうん（色・受・想・行・識）がすべて

空（実体のないもの）であるという考え方こそが眞実の教えである。悟りを妨げる四魔（五蘊魔・煩惱魔・死魔・天魔）と仏はともに奥深く、認識・感覚では捉えがたい（空なる存在である）。

真言行者が瞑想中に得る境地はじつに不思議なものだが、仏の光が輝きはじめるように見えても、慢心してはならない。

それに欺かれてはならない。それもまた陽炎かげと同様に仮のものにすぎない。空も不空も超えた大空三昧こそが、真に伴侶となすべきものである。

夢のたとえ



三、夢のたとえ

ひと時の眠りの中にも無数の夢を見る。

ある時は夢を楽しみ、またある時は苦しみ、どうなるか予想もつかない。人間界と地獄界と天上界とを、それぞれ夢に見て泣いたり歌つたり、どれほどの憂いがあるだろうか。

眠っている間は現実のように感じるが、目が覚めれば消えてしまう。

そうして知るのである。夢の中のことは妄想であり、現実ではないことを。

無明の暗闇の中で長い間眠りにふけっている人々よ、

世の中というものは、とかくつらいことが多いものである。真言行者は悟りの境地を得たように感じても、

それとらわれ執着してはならない。

牢獄のような物質世界に留まつていてはいけない。

陰と陽の気が集まれば、はかない命が生まれ、

あらゆるものも、因縁が尽きれば死んで消え去る。

転輪聖王（古代インドの理想的統治者）も王侯や大臣も、

流れる年月による栄枯盛衰からは逃れることは出来ない。

この十喻を深く観想して修行すれば、最も深い悟りの境地に到達できる。

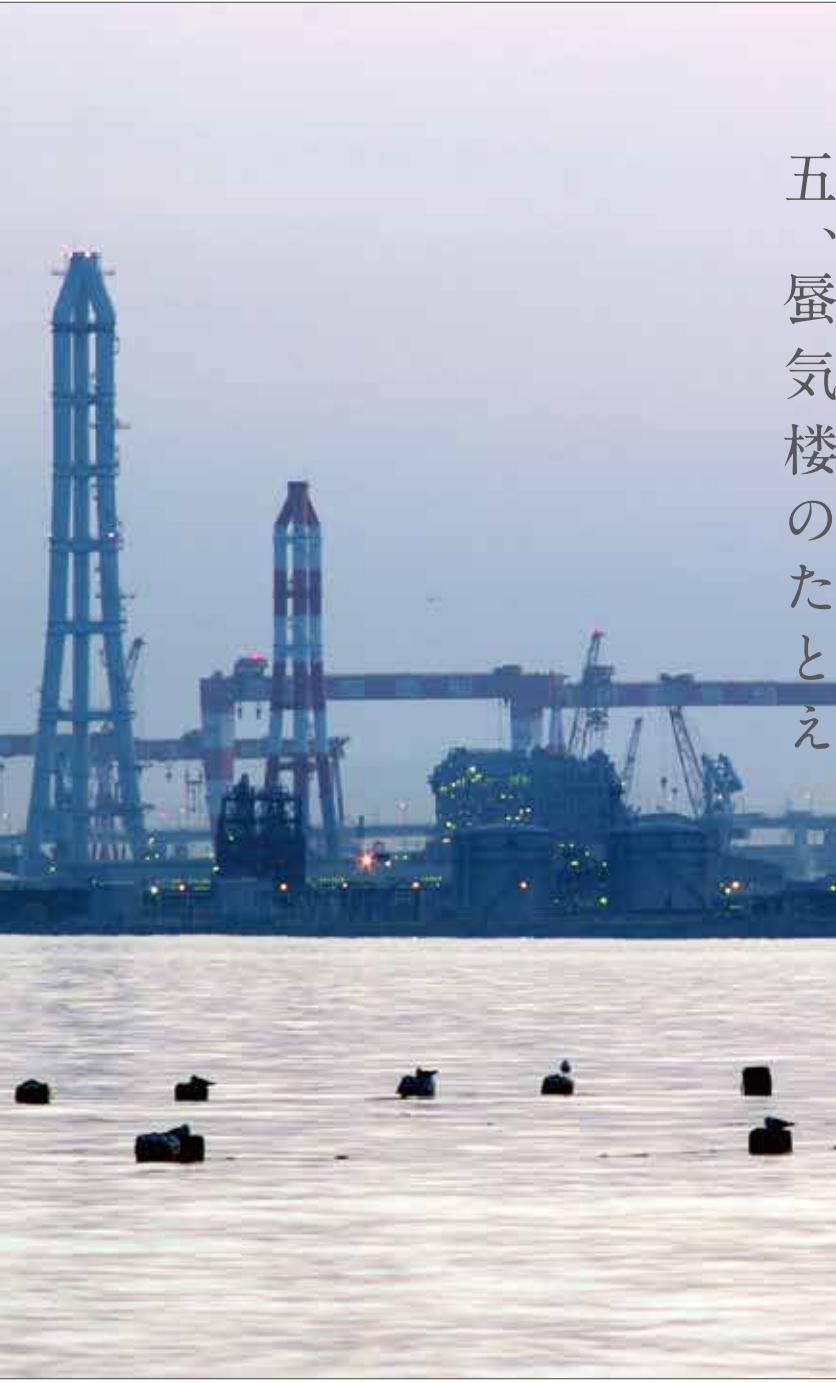
そこは大日如来の全ての徳に満ち溢れた完全な世界である。



四、鏡のたとえ

昔話に出て来る長者が持つていていた円形の鏡、
秦王の宮中にあつたとされる伝説の方形の鏡、
鏡中の像はどこから来るのか分からぬが、瞬時に映つては消える。
これは、因縁（原因と条件）によつて生じるものである。
鏡像は実体そのものではなく、かといつて全くの無でもない。
言語による説明は不可能であり、世人の思慮分別の範囲を超えてゐる。
この鏡像を、自ら作ったとか、誰かによつて作られたとか、
自分と他人が協力して作ったと言うのはいずれも間違ひである。
邪教を信じる人や邪心の持ち主は、妄想にとらわれてゐる。
真言行者の観念によつて心の中に顯現する仏と本人とは
全く同じでもなければ異なるわけでもない。
鏡に映る姿のように、因縁によつて現れるものなのだ。
静かな部屋で瞑想して無明を断ち、仏堂で香を焚き讃歌を唱える。
身口意の三密行によつて心を静め無我の境地に至ると
諸仏が感應してたちまちに来臨する。
そうなつても、喜んだり興奮したりしてはいけない。
もともと仏の世界と我が心とは同じものなのだから。

五、蜃氣樓のたとえ



12

六、響のたとえ



13

口の中、峡谷、空っぽの堂内において、
風（空氣）が動きぶつかり合うことによつて音響が生じる。
愚かな者と知恵ある者とでは、同じ音を聞いても理解を異にする。
ある者は怒り、ある者は喜び、それぞれに反応は異なる。

音の響きの原因を探し求めて、どこにも実体はない。
それは生ずることも滅することもなく、
始まりもなければ、終わりもない。

外界の雜音や自己の内部から生じる雜念に心を惑わされず、
真理の世界に安住して、思い込みによる価値判断を捨てなさい。

海上におこそかで麗しい城郭が見える。
馬や人が東西南北に行き交っている。
愚か者はこれを見てすぐに実体のあるものと思い込むが、
知恵ある者は、これは蜃氣樓であつて実在しない虚像だと知つてゐる。
神社仏閣や人間の住まいも、あるように見えるが
絶対的な存在でないという意味では蜃氣樓と同じである。
大いに笑い飛ばそう。

幼子よ、欲望にとらわれ現世に對して執着すべきではない。

この理を悟つて、真理の世界に住すべきである。

七、水月のたとえ



満月が虚空に静かに浮かんでいる。

川や池、全ての水をたたえた器にその光を映している。これと同じく、大日如来の真理の光は大空に静かに佇み、すべての生き物はその光を分かち合っている。

水面に映る月は仮のものであって真実の月ではない。

人の身体に宿る自我もまた同様に真実のものではない。

この永久不变の真理を悟つて他人のために説き、

如来の大慈悲の心を、衣のごとく身に纏いなさい。

八、泡のたとえ



雨がもうもうとけむりながら水面に激しく打ち付ければ、水中には大小さまざまな泡が生じる。

泡はたちまち生じ、たちまち消えるが、水から離れることはない。この泡はもとの水から生じたものか、雨から生じたものだろうか。

そのどちらでもなく、因(水)に縁(雨などの条件)が重なって生じたものである。

真言行者の中に泡のごとく生じる変化も不思議であるが、

これは心の中に顕現した仏がなしたものであるから怪しみ疑う必要はない。森羅万象すべては自分の心であり、両者は本来一体のものである。

この真理を知らない者こそ、もつとも哀むべきである。

九、虚空花のたとえ



瞼を開閉する時などに空中に花のような幾何学模様が見えることがある。それに実体は無く、たしかな色も形も無いけれども、名前だけが存在している。人は空が雲や霧で晴れたり曇つたりすることを清や濁と呼んで区別するが、虚空そのものは、雲や霧によって影響されない常住不滅のものである。迷える人は現世をたしかなものと思い込み、激しく執着している。

悟りを邪魔する四つの魔も、貪（むさぼり）・瞋（いかり）・癡（おろか）の三毒も、虚空花のように実体の無い幻のようなものである。

恐れず、驚きもせず、感覚や感情から生じる迷いを断ち切りなさい。

十、旋火輪のたとえ



先に火のついた棒を手に持つて、これを動かせば、

光は円形になつたり、方形になつたり、意のままの形に変化させることが出来る。

これと同じように全ての文字の母たる「阿」という文字を

様々に変化させることによつて、無限の仏の教えを伝えることが出来る。

訳者によるあとがき

この「十喻を詠ずる詩」は弘法大師によつて作られた、人々を真理の理解へ導くための詩である。

大日經所説の十縁生句を題材として、膨大な經典の内容を凝縮したものであり、その価値は計り知れない。

しかし、原文は漢詩であり、難解な比喩や仏教用語を駆使したものと、その価値は計り知れない。

そこでより多くの人に大師の思いを伝える（＝如如不動にして人の為に説く）ため、寡聞淺学の身ながら現代語訳による発行を企図した次第である。

本稿の価値の全ては大師と先行研究に歸するものであり、過ちの全ての人々の多くにはその存在すら知られていない。

この詩は「東山の廣智禪師」に送つたものとされているが、大師がこの詩を作つた眞の意団は、広く（未來の）衆生を救うためであつたことは、「千歳忘ること莫れ」という言葉からも明らかである。

平易な表現を優先させるあまり、原詩の含む無量広大な意義を欠落させてしまつた部分も未熟さ故の誤りもともに少なくないだろう。

これらについては、大師の思いをより多くの人々により分かりやすく伝えたいという発願の意団をお汲み頂きご寛恕を乞うとともに、ご指導ご鞭撻の程を謹んでお願ひ申し上げる次第である。

は訳者によるものである。

合掌

讃岐國分寺沙門 大塚 純司

令和元年五月一日

十喻を詠ずる詩 読み下し文（読誦用）

「如幻の喻を詠ず」

吾れ諸法を觀るに譬えれば幻の如し、總て是れ衆縁の合成する所なり一箇の無明と諸の行業と、中にあらず外にあらず凡情を惑わす

三種の世間は能所の造にして、十方法界は水蓮の城なり

空に非ず有に非ず中道を越え、三諦は宛然として像名を離れたり

春園の桃李は肉眼を眩かし、秋水の桂光は幾ばくか嬰を酔わしむ

楚澤の行雲は無にして復た有なり、洛川の廻雪は重くして還て軽し

封著して狂迷すれば二界熾なり、能く観じて取らざれば法身清し

拙い哉迷える者はたれか此を觀せん、超越して阿字の營に還帰せよ

「陽焰の喻を詠ず」

遙々たる春の日風光動く、陽焰粉粉として広野に飛ぶ
体を挙つて空空にして所有なし、狂兒渴して遂に帰ることを忘る
遠うしては有に似たれども近うしては物無し、走馬流川何れの處にか依る
妄想談議して仮名起る、丈夫美女城圍に満てり

男と謂い女と謂う是迷える思ひなり、覺者と賢人と見るは則ち非なり
五蘊皆空は真実の法、四魔と仏とまた夷希たり

瑜伽の境界は特に奇異なり、法界の炎光自ずから相暉く
慢ること莫れ欺くこと莫れ是れ仮の物、大空三昧は是れ我が妃なり

「如夢の喻を詠ず」

一念の眠りの中に千万の夢あり、乍ちに嬉しみ乍ちに苦しんで籌ること能わず
人間と地獄と天閣と、一たびは哭し一たびは歌つて幾許の憂いぞ
睡の裏には実真にして覚むれば見えず、還つて夢の事は虚狂にして優なるを知る
無明の暗室の長眠の客、世の中に處て多かる者は憂いなり

悉地の染宮も愛取すること莫れ、有中の牢獄には留まるべからず

剛柔氣あつまれば浮生出ず、地水縁窮まれば死して休するが若し

輪位と王侯と卿相と、春は榮え秋は落つ逝くこと流るるが如し

深く修して觀察すれば原底を得、大日円圓として万徳周し

【鏡中の像の喻を詠す】

長者の樓中の圓鏡の影、秦王の臺の上の方丈の相
知らず何れの處よりか忽ちに来去する、此れは是れ因縁所生の状なり
有に非ず無に非ず言説を離れたり、世人の思慮は籌量を絶つ

いうこと莫れ自作と共と他起とを、外道邪人は虚妄に繞れる
心佛と衆生とは異同に非ず、因縁にして顕るる、猶し鏡の如し

閑房に攝念して無明を断じ、蘭室に香を焚いて讚の響暢ぶ
三密寂寥として死灰に同じければ、諸尊感應して忽ち來訪す

喜ぶこと莫れ噴ること莫れ是れ法界なり、法界と心と異況なし

【乾闥婆城の喻を詠す】

海中に厳麗なる城櫓を見る、走馬行人南北東す
愚者は乍ちに観て實有りと為す、智人は仮にして空なりと能く知る

天堂と佛閣と人間の殿と、有に似て還つて無なること此と同じ
因縁を尋ね覗むれば曾て無性なり、不生不滅にして終始無し

咲いつ可し嬰兒愛取すること莫れ、能く観じて早く真如の宮に住すべし
一心に安住して分別する」と無かれ、内風外風吾が耳を詮かす

【水月の喻を詠す】

桂影団圏として寥廓に飛び、千河万器各の暉を分つ
法身寂寂として大空に住し、諸趣の衆生互いに入帰す

【如泡の喻を詠す】

天雨濛濛として天上より来たれば、水泡種種にして水中に開く
乍ちに生じ乍ちに滅すれども水を離れず、自に求め他に求むるに自業裁す
即心の変化不思議なり、心佛之を作す怪しみ猜う」と莫れ

万法は自心にして本より一体なり、此の義を知らざるは尤も哀むべし
「虚空花の喻を詠す」

空花灼灼として何の実か有る、無色無形にして但だ名のみ有り
染淨は元來動ずること能わず、雲霧曇晴するを濁清と名づく
實相如にして一味の法なり、迷人妄に二界の城を見る

四魔二毒は空が幻なり、怖れること莫く驚くこと莫く六情を除け
「旋火輪の喻を詠す」

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る
故に翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。
物を覗て人を思い、千歳忘ること莫れ。

天長四年三月一日之を書す。

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

上都神護国祚真言寺沙門少僧都遍照金剛

てんぢゅうじゅうこくそくしんごんじ さもん しょそうじゅう へんじょうこんどう

天長四年三月一日之を書す。

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

上都神護国祚真言寺沙門少僧都遍照金剛

てんぢゅうじゅうこくそくしんごんじ さもん しょそうじゅう へんじょうこんどう

天長四年三月一日之を書す。

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の十喻の詩は、修行者の明鏡、求佛の人の舟筏なり。

一誦一諷すれば塵卷と與んじて義を含み、

一觀一念すれば、沙軸と將んじて以て理を得。

ゆえに翰札を揮い、以て東山の廣智禪師に贈る。

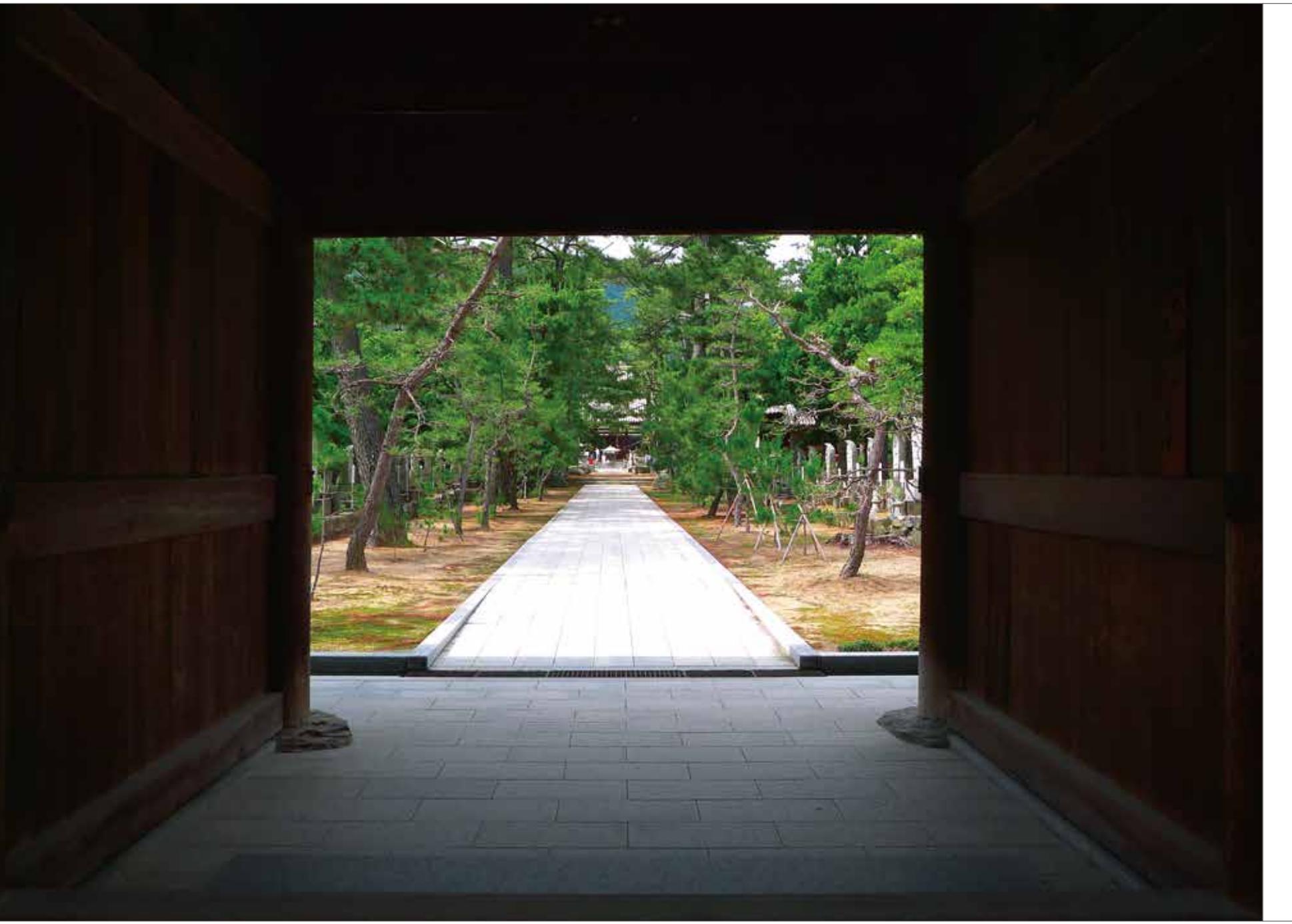
ものみ ひと もつ センカリ

火輪手に隨いて方と円となり、種種の変形意に任せて遷る

一種の阿字多く旋轉す、無邊の法義茲に因りて宣ぶ

跋文

此れ是の



参考文献

「弘法大師全集 第六巻」弘法大師全集編輯委員会 筑摩書房/1984年

「性靈集講義」坂田光全 高野山出版社/2003年

「十喻詩の訓みを通しての語句の検討および跋文の章句の検討」中谷征充
高野山大学密教文化研究所紀要第27号 密教文化研究所/2014年

「弘法大師の『十喻を詠ずる詩』について」神代峻通 密教研究第51号/1984年

※より深く学びたい方は中谷征充氏の論文に原文と書き下し文および解釈と研究誌がまとめられており、
ウェブ上でPDF形式で閲覧できるので参照されたい。

※本誌は商用を意図したものではない為、原価にて配布し代金は増刷のために使用させて頂く。

ご理解とご協力のほど、謹んでお願い申し上げる次第である。

※写真は全て讃岐國分寺境内および香川県内にて筆者が撮影したるものである。

発行

[四国霊場 第八十番礼所] 白牛山 千手院 讃岐國分寺

〒769-0102 香川県高松市国分寺町国分2065

TEL. 087-874-0033

URL <http://sanukikokubunji.jp>



Sanuki-Kokubunji
讃岐國分寺

<http://sanukikokubunji.jp>